

シンポジウム「途上国開発と地理学」参加記

友 澤 和 夫*

地理科学学会との共催シンポジウム「途上国開発と地理学」に参加した 1 人として、私見を綴ってみた。シンポジウムの主旨や発表内容は、別に記されていると思うので、そういった事項には余り立ち入っておらず、あくまで主観混じりの意見や感想が中心であることをご了解いただきたい。

まず特筆したいのは、各発表の内容が総じて興味深かったことである。7 名の発表者は当該分野のエキスパートから構成されており、それぞれがテーマとしている「開発」の内容がよく理解できた点は、非常に有意義であった。発表者の所属をみると、「距離摩擦」に反比例する形で遠方から招かれており、広島では普段お会いできない顔ぶれが揃われていた点も特記しておきたい。この点でのオーガナイザーや関係者の御尽力に謝意を表したい。また、(財)福武学術文化振興財団の助成を受けて開催された点も、これを可能にしたといえよう。一方、中堅どころの研究者の参加が芳しくなかった点は残念に思われた。

今回のシンポジウムは、発展途上国の開発問題を題材としていたが、実際に取り上げられた地域をもう少し厳密にみておきたい。途上国の場合、その国内の地域格差は先進国よりむしろ大きく、面積的には小さい首都都市とその周辺に機能が一極集中し、残りの広大な面積（便宜的に以下では農村部とする）は第 1 次産業中心の経済構造となっている。1980 年代半ば以降から急展開した経済のグローバル化は、途上国を巻き込んではいないものの、先の地域区分でみれば前者が中心である。大都市やその周辺部の開発は急テンポで熾烈であるが、今回はそうした地域は直接的には取り上げられず、途上国の農村部の開発問題が中心であった。このような構成となった事由については、以下でも触れているように幾つか推測できるが、クリアな説明をいただければと思った。

開発の内容については、農村部が取り上げられたので、農業開発、インフラ開発、河川開発、あるいはわが国の中国山地でみられたタタラ製鉄など、自然環境と密接な関係を持つものが中心となった。したがって、自然環境を念頭に置いて、開発の可能性や持続可能な開発に地理学の立場からアプローチすることが 1 つの共通のテーマであったと思われる。前半の発表は、この点に直接、間接に言及されていたが、後半では開発の主体や組織への

* 岡山大学環境理工学部

関心が中心的論題となっていた。各発表を聞き終えた段階では、先の環境に加えて、開発戦略、開発の単位、開発の経済的・社会的効果などが、「途上国開発」を考える上でのキーワードになるのではと思った。

本シンポジウムでは、ユニークな企画が随所に織り込まれていたが、昼食が立食の会食会形式で行われたこともその1つである。これによって、参加者全員の意志疎通が早い段階で出来上がり、午前の発表と午後の発表や討論を円滑に橋渡しする役割を果たした。また、書店コーナーにおいても、単に地図や図書類の展示にとどまらず、地理学の発展に必要な最新のツール、ソフトが用意されており、ついつい長居をしてしまった。昼の休憩時間も、よい意味で休憩にならない充実した時間となった。

総合討論の前半部は、フロアーから事前に出された質問票の内容をオーガナイザーが読み上げ、それに対して発表者が回答するという形式で進められた。その際に、質問者の名前は省かれて内容のみが紹介されたので、誰から発せられた質問なのか分からなかった点が心残りであった。それはさておいて、発表が充実していたこともあり、専門的で踏み込んだ内容の質問が多数提示されていた点には感心させられた。

個別発表の質疑応答を経て、より包括的な観点から、途上国開発と地理学の関わりについて討論がなされた。主要な論点が4つ出された。第1は、得意分野による参加が中心で、総合的な研究がなされていないのでは、という指摘であった。この点については、地理学内部において細分化・専門化が進んでいる現状に鑑み、研究の目的に応じて他の学問分野の人材を受け入れながら、フレキシブルにチームを編成して総合的な成果を出す方式がふさわしいのではと感じた。第2は、持続的発展について、その分析や評価の方法がないのでは、という問題提起であった。これは、今日的なテーマであり、環境問題を考える全ての学問が追究すべきであろう。地理学もその一端を担えるよう内部の努力だけにとどまらず、外へも積極的に情報発信したいものである。

第3は、途上国の実態からの立論、すなわち、途上国で現在生じている現象を分析する際に、先進国側の概念から見のではなく、途上国の現象自体に自己表象権を認めよという主張である。そこでは、「擬似」都市化や「過剰」都市化といった見方は否定されることになる。確かに途上国を地理学的に研究する場合に、主体は何なのか、誰が誰に語っているのか、といった分析上のポジションにさほど注意が払われていないのが現状であろう。この点、研究者側の自覚が促されるべきである。

第4は、ずばり地理学の役割と貢献である。個人的には、地形学など自然地理学は、途上国の様々な開発においてその計画段階で直接に関われる独自の手法を有していると思う。一方、人文地理学はその段階での貢献は不得手であり、これまでは開発による社会・経済

的「影響」の調査研究が中心的であった。つまり、事後の調査が主体であったといえる。これ自体は有益なことであるし、今後も続ける必要があることに違いないが、他方、計画段階での参画が社会的に求められていることも事実である。この課題に応えられる研究者の育成、システムづくりが学者集団としての大事な仕事である。

最後にオーガナイザーが全体をまとめられ、予定の時間をやや過ぎたところで本シンポジウムは終了した。多国籍企業と途上国開発、アグリビジネスと農村開発、都市内部の再開発や郊外の開発など、取り上げてもらいたかった事項は多々あったが、これは少し欲張りすぎであろう。発表の内容、総合討論で出された質疑や論点は、いずれも深く考えさせられるところがあり、実りの多いシンポジウムであったと評価できる。改めて、発表者の方々、オーガナイザー、関係者各位に心より御礼を申し上げたい。